

# クレモネーゼ

現代製作家の解釈と挑戦

名器揃いと讃えられる1715年製の  
ストラディバリのバイオリン。  
その中でも最も有名なのが、  
クレモナの名前を冠する  
“Il Cremonese クレモネーゼ”

力強く莊厳な佇まいの造形

19世紀、バイオリンの名手  
ヨーゼフ・ヨアヒムが終生愛用

「力強く広がる」

「輝きが有りふくよか」

「4弦ともバランスが良い」

と絶賛された音

1961年12月18日

ストラディバリの224年目の命日に  
クレモナ市の所有となった



## Il Cremonese

その男は待ちわびていた。

1715年クレモナ、ポーランド王室の楽団を率いてクレモナでのコンサートを大成功に導いたバイオリニスト、ジャン・バティスト・ヴォリュミエ(1667-1728)は、新たな任務を担いクレモナに数ヵ月滞在する事になっていた。それはポーランド王室が注文したストラディバリのバイオリン12台の完成を見届け、王室へ無事に持ち帰る事であった。

当時のクレモナは、スペイン継承戦争が終わりを迎えたのも束の間、疫病が発生し街中に病院が急造される程に荒廃しており、ようやく持ち直し始めていた経済もまた傾いてしまっていた。

この影響は少なからずバイオリン製作家達にも及んでおり、1715年、クレモナのバイオリン製作の元祖であるアマティ家の4代目ジロラモII・アマティは、借金の返済に事欠き夜逃げをしている。また、ガルネリ家2代目ジュゼッペ・ガルネリが、後に、息子であるガルネリ・デルジェスを生涯苦しめていく事になる多額の借金をしている。ルジェーリ家の三男ヴィンチェンツオ・ルジェーリはこの年を振り返り、苦難の日々であったと手紙に残している程であった。

そんな中、既に71歳を迎えていたストラディバリだけが、ヨーロッパ中の顧客から絶え間なく舞い込む注文に忙しくしていた。ヒル商会の資料によると、確認した楽器の本数だけでストラディバリは年間21本は製作していた事になり、失われたであろう楽器も含めるとその数はさらに増え、ストラディバリはまさに黄金期を迎えていたのである。それでも、ポーランド王室からの12本のバイオリンの注文というのは、半年は掛かる大きな仕事であった。

現存する1715年製のストラディバリのバイオリンは、どれも名器と讃えられる楽器ばかりであるが、その中でも最も有名なバイオリンが、クレモナの名前を冠する“**Il Cremonese**クレモネーゼ”である。

そして、その圧倒的な存在感の裏板や作りの丁寧さから、ポーランド王室のために製作された12台の内の1台ではないかと考えられているのである。

ようやく完成した12台のストラディバリのバイオリンを、ポーランド王室へと持ち帰ったヴォリュミエは、大作曲家ヨハン・セバスティアン・バッハと親交が深く、翌年1717年にはバッハをワイマールのオルガン奏者に招いており、このストラディバリの12台のバイオリンをバッハも見ていた可能性もある。



## 伝説のバイオリン奏者ヨアヒム

クレモネーゼが次に歴史上に登場するのは1800年代後半のパリである。Gand&Bernardel商会が扱った122本のストラディバリの中には、数人のバイオリニストやコレクターの手に渡った後、1889年、ヨーゼフ・ヨアヒム(1831-1907)の手に渡る。ヨーゼフ・ヨアヒムは1800年代を代表するバイオリニスト・作曲家であり、ブラームスのバイオリン協奏曲は彼の為に書かれたものである。それほどのバイオリンの名手が終生、愛用したのがこのクレモネーゼなのである。

ヨアヒムは他に数台のストラディバリを所有していたが、彼が最初に手にしたストラディバリは、現在は”Joahim-Ma”と言う名で知られる1714年製の楽器で、クレモネーゼと同じモデルで作られている。また、もう1台はクレモネーゼと同じ1715年に作られ、裏板はクレモネーゼと同じ樹から作られ、モデルや細部の作りまで酷似している双子の様な楽器であり、現在は”Joahim-Aranyi”的名で日本財團が所有している。ヨアヒムはこの時代のストラディバリの音や弾き心地を追求し、58歳にして遂にクレモネーゼに出会い、そしてこの楽器だけは、甥でありバイオリニストであったハロルド・ヨアヒムへと、死を前にして託しているのである。



ヨーゼフ・ヨアヒム  
Joseph Joachim 1831-1907

## クレモネーゼの造形

クレモネーゼはなんといってもその力強く莊厳な佇まいの人々を惹きつけているが、そのボディーラインはG型と呼ばれるモデルから製作されている。

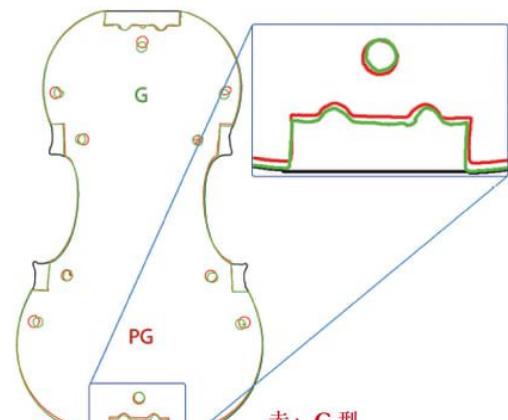
現在、ストラディバリが実際に使用していた型が12台残されているが、その中で最も大きく、Grande(大きな)を意味するGと書かれている型で1708年と刻まれており、これはストラディバリが最後に設計した集大成ともいえる型である。近年のクレモナ・バイオリン博物館による3Dデータでのクレモネーゼの横板との検証においても、左右非対称な箇所までこのG型と良く一致する。基本的なラインは、他のモデルやアマティ家が使用していたグランドパターンと呼ばれるデザインと似ているが、下部が長く膨らんでおり、それが大きく重厚感のある印象を作り出している。F字孔の形は同じ年代の楽器に比べて太く力強く、直線的である。

また、パフリングも同じ年代の楽器に比べて0.1mm太く、0.3mmほど内側に入れられている。コーナー部でパフリングが合わさる箇所では、ナイフで入れた隙間を黒い樹脂で埋められており、個性的な流線型



を描いている。この技法はアドレア・アマティが既に用いていたが、クレモネーゼはより大胆である。表板の木は年輪年代学の解析によると、1690年代に伐採された樹で作られている。裏板はクレモネーゼを何より特別なものにしていて、一枚板で空(もく)がとても深く太く入っており、イタリア語で空を「Marezzatura 海の様な」と表現するが、まさに押し寄せる波を俯瞰したかのような迫力である。この時期のストラディバリは重厚感のある意匠が特徴であるが、この型やパフリングなどの造詣、裏板の空などがクレモネーゼにより一層、力強く莊厳な印象を与えていているのである。

ニスは各所にオリジナルのニスが残っており、クレモナ・バイオリン博物館で行われたIR・XRF解析では、表面全体からは安息香をベースとしたアルコールニスの保護膜が検出され、その下層からは樹脂化したオイル成分とオイルニスの乾燥促進剤である鉛の成分が多く検出される。その他、顔料に含まれる鉄分、木質に近い層では目止めに使われる石灰や珪藻土に含まれるカルシウム、カリウム、硫酸塩、鉱物由来のケイ酸塩が検出されている。また、表板の木質のすぐ上の層からはカゼインが、裏板と楽器内部からは膠が検出されている。この解析結果はバイオリン博物館で解析された他の20台以上のストラディバリと一致する。



赤: G型  
緑: PG型  
黒: クレモネーゼの横板



## クレモネーゼの音

幾度となくクレモネーゼを使ってコンサートを行ってきたバイオリニスト、サルバトーレ・アッカルドは「その反応の良さに驚くと共に、ストラディバリらしい高音域に魅力が有る」と評している。また、クレモネーゼが初めてクレモナに持ち込まれ、購入を決める際に行われた審査では、その音を「力強く広がりのある音」、「輝きが有りふくよか」、「4弦ともバランスが良い」と記録されている。

それを裏付けるように、バイオリン博物館で行われた三次元方向での音の指向性の計測では、全ての弦において、全方向に満遍なく、かつ高いデシベルで音が広がっている事が確認された。また、数十人のバイオリン製作家と音楽家による、音の官能評価を元に開発されたアルゴリズムでの解析において、明るい音色を示す周波数帯が他の楽器よりも吐出しており、指向性においても明るい音色を示す周波数帯が前方向に強く発せられている。そして本体は 369g と驚くほど軽く、反応の良さが伺える。これらの事は、冒頭のサルバトーレ・アッカルドの証言を裏付けている。

前述したように、楽器の内部からも膠が検出されたが、その分子構造



の経年劣化が楽器表面から検出されたものとほぼ同じ程度であり、少なくとも数百年単位で楽器の厚みを変えられていない事が推測される。この事から、この楽器を愛用していたヨアヒムは、今と変わらない音色でブラームスの協奏曲を演奏し、この楽器を最初に受けとったヴオリュミエさえもこの音色を楽しんだかも知れない。そして、その音をバッハも聴き入っていたのかも知れない。

## クレモネーゼの名を冠する

1962年2月5日、クレモナ市民は待ちわびていた。

それまでクレモナの観光の目玉として、様々な国際イベントを開催してきたストラディバリ博物館であったが、道具や資料が展示されているのみで、肝心のストラディバリの楽器が1台もないままであった。1959年「クレモナにもストラディバリを」との機運が高まり、文化庁から資金が下りる事になった。しかし、バイオリンの聖地であるクレモナに相応しいストラディバリを見つけるのは、予想以上に困難を極めた。楽器を探す責任者に製作家フェルディナンド・ガリンベルティが選任され、ガリンベルティはヨーロッパやアメリカ各地から売りに出ているストラディバリの情報を集め、最終的に2年間で11本のストラディバリが候補に挙がったが、どれも彼を満足させるものではなかった。諦めかけていた1961年12月12日、ヒル商会から電報で2台の素晴らしいストラディバリあるとの連絡が入った。ヒルは3日後の12月15日にはクレモナに2台の楽器を携えて訪れていた。即座に楽器の評価と試奏会が開かれ、同日、正式にこの1715年製をクレモナ市が購入する事を決定した。3日間の関税と支払い手続きを経た同年12月18日、クレモナ市が正式にこの楽器の所有者となった。

それは奇しくも、224年目のストラディバリの命日であった。

バイオリンの聖地クレモナにストラディバリを、と動き出してから3年、1962年2月5日正式にバイオリンが引き渡され、ポンキエッリ劇場でセレモニーと演奏会が開かれ、待ちわびていたクレモナ市民からの歓喜と共に迎えられた。そして、この1715年製のストラディヴァリは”Il Cremonese クレモネーゼ”という、バイオリンの聖地であるクレモナの名を冠する事となったのである。

その後、60周年を迎えた今でも、クレモネーゼは世界中の人々を魅了し、バイオリン製作家の指針であり続けている。そして、バイオリン博物館の宝物の間の一番奥に鎮座し、バイオリンの聖地クレモナを代表するバイオリンとして、その存在感を放ち続けている。



クレモナ市のバイオリン博物館に鎮座する  
Il Cremonese クレモネーゼ